九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

明治期福岡地方石油史（四）：石炭油から石油へ

入江，寿紀
西日本鉄道

https://doi.org/10.15017/13623

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 6, pp.60-67, 1976-03-15. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

明治期福岡地方石油史(四)

――石炭油から石油へ――

入江寿紀

目次

初めに

一、石炭油から石油へ
(一)臭水から石炭油へ
(二)石炭油から石油へ
(三)取締規則制定と品質の向上
(四)事故と公害（以上、3号）

二、用途の多様化
(一)ランプ
(二)街路灯
(三)熱用としての石油
(四)駆虫用としての石油（以上、4号）
(五)陸用石油発動機
(六)船舶用と機関車
(七)自動車
(八)機械油、外（以上、5号）

三、販売店と製油所
(一)国産油と輸入油
(二)明治中ごろまでの石油販売
(三)露油全盛時代
(四)市況の起伏とスタンダードの勢力拡大
(五)スタンダードの九州市場独占
(六)ライジングサン西戸崎製油所設立
(七)販売政策と市況（以上、本号）

三、販売店と製油所

(一)国産油と輸入油

今まで福岡県を中心とした明治の石油の用途を見てきたが、ではその消費量はどの位だったのだろうか。

しかし残念ながら地元販売量に関する統計を持たない。これは、筆者がまだ入手出来ずにいるのではなくて、当時そのような統計は作製されなかったためらしい。従って、国産油産出量と外国油輸入量を挙げ、類推する参考にすることとする。なお次に掲げるのは、〔工業之大日本〕明治四十四年一月一日号「日本石油業の起源と其発達」中に挙げられたものである。

明治元年～四十一年全国原油産額及外国石油輸入表

年次	全国原油産額(石)	外国油輸入額 数量(石)	外国油輸入額 価格(円)
明治元年		六三九	七二三六
二年		一一七	一六六二
三年		一〇五四	一五一六
四年		三〇四六	二一一七〇
五年		八九三六	一六〇六〇八
六年		二〇〇一九	三三〇五九九
七年	三〇七九	二五八二四	三〇六七二三
八年	四八三〇	五五〇七	五七三六七一
九年	八一五五	五七七五	四四四一三四
一〇年	一〇一一四	五三六四五	五〇五九八
一一年	一八九二〇	二一三七五五	一八〇三〇七六
一二年	二四八一六	三三五九九三	二一八五二三

一三年	二六、九七四	二九七、九一八	一、四〇〇、四七一	
一四年	一七、七二一	一六〇、一四四	九七九、一一二	
一五年	二〇、五一五	四一三、六四四	二、三二〇、九〇五	
一六年	二一、六五九	四七二、六二一	二、四五六、二六一	
一七年	二九、五四一	三五〇、六九八	一、七七三、三六一	
一八年	三〇、九三一	三五二、七二〇	一、六六七、七二二	
一九年	四〇、一一三	五〇二、〇〇四	二、三五八、四九八	
二〇年	三〇、三〇四	四二一、一七七	一、八七一、四二八	
二一年	六九、六〇四	五七〇、一五五	三、五一九、二五五	
二二年	五五、八七一	七三九、九七七	四、五八七、一三五	
二三年	五四、三九九	九三三、二七二	四、九五〇、二五六	
二四年	五五、九八三	八〇九、六四三	四、五三五、七二〇	
二五年	七二、八九三	六五三、七八六	三、三二八、三九八	
二六年	九四、一四五	九九五、二六八	四、四〇一、〇四一	
二七年	一五一、九八六	一、一一二、八七四	五、一三五、三三二	
二八年	一四九、四九七	八八三、〇四八	四、三〇三、九二八	
二九年	二〇八、四〇〇	一、〇九三、八五八	六、三三一、〇三六	
三〇年	二三一、二二〇	一、二二一、一六四	七、六六七、三五〇	
三一年	二八〇、七四二	一、三五八、一〇九	七、五五二、八七九	
三二年	四七四、四〇六	一、〇四八、四四七	七、九一八、一四八	
三三年	七六七、〇九二	一、三五六、八四六	一四、一六二、六五二	
三四年	九八三、七九九	一、三七九、九二八	一四、九四三、四〇〇	
三五年	八七七、八三七	一、五八五、〇八三	一四、九三七、一六九	
三六年	一、〇六五、一一六	一、二五五、三八四	一一、四五五、六九六	
三七年	一、〇七三、六四〇	一、七一五、一〇八	一八、二〇一、四九〇	
三八年	一、一八七、一三六	一、二三二、七六九	一二、〇六一、二六一	
三九年	一、三七八、三九七	一、二四八、〇〇〇	一二、三二六、八九二	
四〇年	一、五一三、二四七	一、四七三、四七八	一四、三二四、八〇〇	
四一年	未詳	一、五一六、三六四	一五、一〇五、二〇〇	

明治初年の石油輸入については、〔明治世相編年辞典〕明治二年の項に次のように書かれている。

この年、はじめて石油を輸入す（経済年表）。はじめは長崎で中国商人の手によって輸入され、二年は八函、三年七〇函、四年四一七函と増加した。国内ではそれをビールの空瓶に詰めて四年頃は一本一分の値段で売りさばいた。四年頃の売れ高は六両一分であった。（日本石油史）

明治初年の石油は、主として横浜、神戸の港から輸入されたのだろうが、長崎からもごく少量が輸入されていたことが、この辞典から知られる。また、前掲表中明治初年の国産油の所には――が付されているが、小倉の〔中原嘉左右日記〕には明治三年一月越前油・大阪油を購入したことが書かれているから、九州でも一部の人の間では国産油を使用しており、――の意味はその産額が不明だと言うことを意味する。

石油輸入は、最初の間ほとんど米国が独占、その販売権は横浜のスタンダード商会が握っていた。

しかし明治二十六年から、露油の輸入が急激に増加する。当時の露油の状況については、明治三十一年一月二十一日の〔福陵新報〕に次の記事がある。

◉露国の石油採取業、　露油の重もなる産出地はアブシェロン半島に於けるバクー地方にして、ラレック・クーバン其他後裏海州・達爾給斯丹・クリミヤ及高加索の或る地方に於ても亦豊富の源泉存する由なるが、採取業の発達せしは最近年にして、当初の産出高は一ケ年二百万ブードに過ぎざりしも、千八百七十二年に於ける新条例発布は石脳油業の発達に一新時期を与へたるものにして、露国全部に於ける石脳油の産出高は千八百八十二年に方りて

僅に百七十五万ブードなりしが、千八百八十二年に於て既に五千万ブードに達し、其より十年をへ千八百九十二年に於て三億ブードの多額に上り、千八百九十四年に於て三億千六百万ブードに達せり。而して外国への輸出高は、千八百八十一年には百万ブードに過ぎざりしもの千八百九十四年に於て五千三百万ブードに増加し、輸出価格より見るときは穀類、亜麻及材木に亜ぎて最巨額を占むと。

なお参考のために、三十年中横浜出入石油についての記事を、三十一年一月七日の〔福陵新報〕から転載しておこう。文中、錨・タンクは露油、チャスタ・ホーキは米油である。

横浜増田商店の調査に依れば、昨年中石油の横浜を出入せるもの左の如く、合計四百八十二万五百八十六函にして稀有の巨額に達したり。

	輸入高	輸出高
チャスタ	一、四五二、五二一	一、三八〇、五二九
ホーキ	二五一、二五〇	二五九、五八〇
錨	三八四、五一〇	三五二、九三五
スマトラ	四七、八七一	四七、八七一
タンク	未詳	六六三、五一九
合計	二、一三六、一五二	二、六八四、四三四

（以下略）

このような露油の急伸も、米油との販売合戦に敗れて後急速に日本における販路を失い、一時米油がわが物顔に日本国内を横行する。しかし明治末になって、シェル系のライジングサンが日本市場に殴り込みをかけ、大正へと移って行く。

石油の供給量は、表に見るように、明治の中ごろから急激な増加を続けるが、特に国産油の増加が著るしい。外油のうちでは、起伏はあったが、おおむね米油がその主力を占めていた。米国産油については、大正元年一月二十八日の〔福岡日日〕に次の記事があるので、参考のために挙げておこう。

○米国原油の増加

一九一一年度に於ける世界の石油噴出量は三億四百四万石にして、此内米国の産出額は其六割三分を占め、前年より多きこと実に九百七十万石に上り、其総産出価額二億六千八百八万円に達し居れり。斯く米国に於て特に多量の増加を見たるは重に加州産額激増の結果にして（同州昨年度の噴出量は七千百五十万石）、此外ヴキトンラの新噴油坑、・ルイジアナ州のカッド及び北部テキサスのエレクトラ等に於ける増量も、之が一因として算ふべきなり。

今各地の生産額中重なるものを表示すれば、左の如し。

加州	七一、五〇四、千石	
オクラホマ	四九、四一四	
イリノイ	二七、五九九	
ルイシアナ	九、四四七	

等なるが、更に合衆国の全産額を各年別に示せば、

一九〇一年	六一、〇六二千石
一九〇三年	八八、四〇六
一九〇五年	一一八、五五一
一九〇七年	一四六、一六四
一九〇九年	一六一、一九〇
一九一一年	一九三、九九五

にして、即ち最近に至りて産額の増加益益著るしき其一方に、其

価格は毫も不落せざるのみか益益昂騰するのみ。蓋し最近燃料としての需要激増せること、輸送力の増加及び原油精製法の改善による各地の貯蔵額減退とに基くものなるべしといふ。

以上が、明治における石油供給販売についての概要だが、次項以下で、この石油をめぐっての業界の動きを、福岡市を中心として述べよう。

なお、国産油は四十二年以降明治末にかけて減少している。

(二) 明治中ごろまでの石油販売

明治十八年（一八八五）八月には、新聞に石炭油事故続発の記事（参照一、(四)事故と公害）が見えるから、当時福岡地方にも石油を販売する店があった筈だが、記事や広告には一切見当らない。おそらく当時石油販売は、専門店や特約店ではなく、一般の商店の中いくつかが他の商品とともに販売していたものだろう。

しかし、石油の販売量が増加するようになったので、十八年十一月には、「近来石炭油に水を調合し売出す者あるとの事を早くも警察署ハ探知し、頃日其奸商を捕縛し、今専ら取調中なりと。其犯罪者ハ山口県赤間関区（〈筆者注〉現下関市）入江町の福本平造という者の由なり。」というような不心得者も現れるようになった。目先の小利に捕われてこそこそしたインチキをする者が出るのは、当時の日本人の弊害であって、この点、支那商人の信頼度の高い取引きに関する記事に出会うたびに情けない気持ちになる。

初めて新聞に石油販売広告が出るのは、十九年（一八八六）六月五日の〔福岡日日新聞〕のようだ。その広告には、「舶来石炭油大販売」として、「各位ノ御便利ヲ量リ、石油半函ヨリ幾千函ニ至ルモ下直ニテ販売仕候間、御来求奉願候也。博多上洲崎町二十二番地、大坂重明舎出張店。」とある。このように、福岡市における最初の本格的な石油販売店は、大阪の商社の出張店として現れた。

しかし二十二年（一八八九）十二月になると、福岡市にも石油を卸売りする店が出来、同月五～七日の〔福岡日日〕には次の広告が連載されている。

石油卸売広告。右本月五日ヨリ卸売開業候条、大勉強仕正直に販売致候間、陸続御求ヲ乞フ。十二月。福岡紺屋町七番地、発売所、山下円造。

ランプ用としての石油の需要が増大してきた二十三年（一八九〇）九月には、それまで米国およびロシアから石油を直輸入し販売していた三井物産本店と博多対馬小路三井物産出張所では、従来米油には令印松箱石油・露油にはM&e〇二印魯油の商標を付けて商品の信頼度を高めるようにしてきたが、更にお客の便を図り販売量を増加しようとして、石油の売渡し証（販売予約切手）を考案している。売渡し証とは広告によれば、「時ノ相場ニ従イ幾分之の約定金領収ノ上ハ、約定個数ノ証書差出シ置キ、何時ニテモ御入用ノ節全額亦ハ内渡シ等御随意差上可申。尤モ他エ御譲渡相成候其都テ御便利ニ任候義ニ御座候。」というものだった。

また、二十六年（一八九三）二月一日博多上新川端町五十六番地に石油販売店を開いた高瀬屋（柴田与右衛門）では、開店祝いとして開店後一週間元価（原価）販売を行なっている。

明治の前半には大して売れなかった石油も、明治も中ごろになると使用量も増大（参照前項）、それと共に本式に石油を扱う店も現れ、そろそろ販売政策を考える時代となってきた訳だ。

これらの石油は、このころまでは舶来石油がほとんどを占め、（参照前項）、特に九州では独占に近かったようだ。その舶来石油も、最初は米国スタンダードのひとり舞台だったようだ。しかし明治十

八（一八八五）～九年ころから露国石油が輸入されるようになり、米露間で販売合戦が繰り広げられるようになった。〔明治事物起原〕

これら石油は、最初の間箱入り石油缶で取り扱われていた。しかし二十六年（一八七三）米露とも石油タンクに入れて輸送するようになり、石油販売は新時代を迎えることとなる。次に「タンク石油輸入」と題した〔明治事物起原〕の文を引用して説明に代えよう。

タンク石油輸入　明治十八九年の交、露国石油滔々として我国に流入し、従来独占の姿なりし米国スタンダードとの間に、激烈なる競争を開始するや、浅野総一郎、将来の大勢を観破し、進んで日本に於ける米油一手販売を引受け、越て明治二十六年には、輸入石油の箱代頗る巨額に上るを不利とし、横浜平沼にタンクを設けんとするや、反対者の中傷運動最も甚しく、其極数百の暴漢忽然として、北新堀なる氏が邸宅を襲撃したることありしも、愈よタンクの成就するや、輸入石油の価格は、氏の予想の如く低落し、大に世を益する所ありし。

タンク石油とは、広告によれば、タンクで輸送することにより輸送費の軽減を図ったものだが、〔明治事物起原〕の文によれば、貯蔵にもタンクを利用したものらしい。

(三)　露油全盛時代

明治二十六年（一八九三）、米国スタンダードがタンク輸送を開始すると、横浜と神戸に店を持つ露油の輸入元で英国系のサミュルサミュル商会もタンク輸送を開始、本格的販売拡張に乗り出してきた。同社は米油に対抗するため、二十六年三月大阪露油と関西以西の一手販売契約を結んでいるが、大阪露油は販売のために設立されたサミュルサミュル商会の子会社のような気がする。

しかし最初の間九州で販売する露国産石油は、長崎市のホーム・リンカ商会が輸入、錨印・露国バトム産最上石油の名で販売していた。その後大阪露油が露油の一手販売をするようになった翌月四月、同市恵美須町三十三番戸、松尾巳代治と九州一手販売の契約を結んでいるが、以後しばらくの間リンカ商会の名は出てこない。このように販売系列をたどってくると、サミュル・リンカ両商会の間には何か資本的つながりがあるのではないかという疑問が湧くが、よく分からない。

大阪露油は、露油の関西以西の一手販売権を得ると、その翌月の四月には久留米市に特約販売所を開設、翌五月には博多の牟田商店とも特約販売契約を結び、九州市場の開拓に乗り出してきた。次に挙げるのはそれらの広告だが、牟田商店は、福岡橋口町、岡松太七・福岡薬院町、山下円造・博多中石堂町、豊村次平・博多行町、園田小七の四店を傘下に収めて、それぞれ売捌き受持ち区域を定めている。

▲特約販売所設置広告（二六、四、二七、福日。同五、二九、福陵）

弊社石油発売ノ日猶浅シト雖モ、品質精良光輝鮮明ナルト、容量ノ充分ニシテ且ツ代価の低廉ナルトヲ以テ、既ニ大方諸君ノ御好評ヲ博フセリ。就テハ今般一層購買者諸君ノ御便利ヲ謀ランガ為メ、左ノ所ニ特約販売所ヲ設ケ同国内ハ弊社ヨリ直接販売不致候間、向後石油御入用ノ諸君ハ同所ニ於テ御請求被成下、弊社同様御愛顧ノ程希望仕候也。

明治二十六年四月

大阪市西区靱上通三丁目拾番屋敷、大阪露油合資会社

筑後国石油特約販売所

福岡県久留米市通町四丁目、野田儀八

▲特約販売所設置広告（二六、七、一六、福日）

（右と同文につき省略）

福岡市博多石油特約販売所

福岡県福岡市博多馬場新町六十八番地　牟田万次郎

なお、当時どのような人が石油の大販売元となったかを知ることは、当時の石油の地位や世相を知る上で大事な事と思うので、牟田万次郎の略歴に触れておこう。

▲牟田万次郎略歴

牟田家は代代肥前鹿島藩士であって、万次郎は、幼時より儒者谷口藍田に学び、門生中群出していたと言う。彼は少壮のころ政界に出、初め長崎県県会議員をしていたが、佐賀県分置後は佐賀県県会議員となった。

その後彼は米穀仲買人となったが、文化人の常として随分新事業を手掛けている。

以下その後を追ってみると、明治十五年七月、松田正久とはかり長崎市で西海日報発刊、明治十六年佐賀県会に九州に鉄道を敷設するための県費調査を建議可決、など、文化を先取りするような事業には色々手を出している。しかしそのおもな事業は、電気・軌道・米穀取引所関係だった。九州電灯鉄道の前身広滝水力電気・九州電気・博多電灯・佐賀県の祐徳軌道・佐賀軌道・川上軌道など、みなその創立に参画している。しかしなんと言っても、特に名を知られているのは取引所関係だった。すなわち、佐賀米穀取引所では筆頭株主として二十余年理事長を勤め、その間十余年は博多取引所理事長を兼務、また若松取引所・長崎取引所の理事長を努めたこともあった。

なお、彼は、現在祇園町に本社を置く牟田石油社長の祖父にあたる。

大坂露油の九州開拓は、翌二十七年（一八九四）五月二十六日長崎に支店を開設するに及んでいよいよ本格化してきた。このころには、同社の全国特約販売網も相当整備されてきているようだ。次に同年五月三十日の〔福岡日日〕に掲載された広告を示そう。

▲井支店設置開業広告

長崎県長崎市西浜町七十一番戸、大坂露油合資会社長崎支店。

右支店ヲ設置シ本月廿六日開業、廉価ヲ以テ「タンク」石油販売可仕候間、弊社同様御愛顧ノ程奉願候。

明治二十七年五月

大坂市北区中之島一丁目三十二番屋敷、大坂露油合資会社

神戸市栄町三丁目二十七番屋敷、同神戸支店

左ノ個所ハ特約者未定ニ付、弊社又ハ支店ヨリ直接販売ヲ為スベシ。御入用ノ諸君ハ続続御注文ヲ乞フ。

但シ特約希望ノ諸君ハ、弊社又ハ支店ヘ御申込ヲ乞フ。

越前敦賀、近江彦根、伊勢桑名、志摩鳥羽、山城伏見、河内牧方、和泉堺、岸和田、淡路洲本、伊予今治、播磨明石竜野、備前岡山、備中倉敷、備後尾ノ道、周防徳山、山口、長門馬関、丹波福知山、丹後宮津、但馬出石豊岡、伯耆米子、因幡鳥取、出雲松江、石見浜田、隠岐八尾、筑前若松、豊前小倉、豊後大分、日向宮崎、都城、延岡、薩摩川内、壱岐勝本、対馬厳原、琉球那覇。

▲井タンク石油発売広告

兼而、品質精良光輝鮮明ナルト、代価低廉ニシテ而カモ容量充分ナルトヲ以テ、大方諸君ノ好評ヲ得タル「タンク」石油ハ、其販路日増ニ盛大ニ趣ケリ。就テハ一層購買者諸君ノ御便利ヲ謀リ、長崎港神崎ニ「タンク」ヲ設置シ、来る二十六日ヨリ弊支店ニ於テ右石油販売、精精勉強可仕候間、本社同様続続御注文被成下度、

此段広告仕候也。

追而各地方特約販売者諸君ハ本社又ハ弊支店就レニテモ御便利ニ任セ御随意御注文ヲ乞フ。

明治二十七年五月

長崎市西浜町七十一番戸、大坂露油合資会社長崎支店。

このようにして大坂露油の九州開拓は急速に進展してきたのだが使用石油缶は、新しく製作した日本製で、他のメーカー品と区別するために外箱を松板で造り、石油の空缶は高価に買い取る旨の広告を出している。次にその二十七年七月十四日の〔福岡日日〕に出された広告文を掲げる。

新缶松函入「タンク石油」発売広告

弊社販売ノ「タンク」石油ハ、其販路日増ニ盛大ニ趣クニ就テハ益益購買者諸君ノ御便利ヲ謀リ、容器ニ一大改良ヲ施シ、弊社製缶所ニ於テ英国精製器械ヲ以テ製作セル新製鉄力缶詰「タンク」石油発売可仕候間、予テ御通知致置候弊社石油特約販売店ニ於テ御購求被或下度奉願候也。

一、新鉄力缶ハ極メテ堅牢ニシテ外国製ニ劣ラズ。従テ漏洩ノ患アルヿナシ。

一、外函ハ松ノ新板ニテ堅固ニ製作セルヲ以テ、運搬ノ為メ破損ヲ来タスヿ尠シ。

一、新鉄力缶詰ノ容量ハ極メテ充分ナリ。

一、今回発売ニ係ル空缶函ハ、従来ノ古缶函ニ比シ精精高価ニ買受クベシ。

明治二十七年七月

大坂市北区中之島一丁目三十二番屋敷、廿　大坂露油合資会社。

神戸市栄町三丁目二十七番屋敷、廿　同神戸支店

長崎市西浜町七十一番戸、廿　同長崎支店。

博多蔵本町五十四番地、太田屋商店・太田清造が、石油販売を始めるため神戸の石油商と特約したのも二十六年八月だった。

このように二十六～七年に石油販売店が急速に増加しているのは、ランプ用石油の需要が増加したため石油価格が高騰、それにつれて日本の産油量および輸入量が激増したためらしい。

大坂露油の積極販売策は非常な効果を収め、従来米油の十分の一にも満たなかった露油は、次第にその得意先を奪取、スタンダードではその対策に狂奔せねばならなかった。しかし露油が長崎に支店を開設した効果は大きく、北部九州ではしばらくの間露油の全盛時代が続いているようだ。また日本の西半分について見ても、可成りの販路を獲得しているように思える。

二十六年に始まる激しい石油の販売合戦は、以後いろいろな新しい販売方法を産むことになる。次にその一例として、二十八年（一八九五）一月一日の〔福岡日日〕に掲載された太田清蔵商店の広告を示そう。ただし、文中大坂菊田火止石油店（参照二、(一)ランプ）とあるのは、前述神戸の石油商とどのような関係にあるのか分からない。

恭賀新禧（新年のよろこび）

太田屋石油店ハ各得意ニ対シ、売買割引券ヲ呈ス。太田屋石油店廿七年度割引金額ハ七十八円也。

石油店は大阪菊田火止特約店なり、石油店は専業の外種子油を販売せり。石油店は専業の外魚油色油類販売せり。石油店は他店と異り安価精実の特色あり。石油店は顧客の便ニ依り甲乙丙割引券あり。

大 福岡市博多蔵本町、太田清蔵商店。

病気ニ付拝趨ノ礼ヲ欠ク、太田清蔵。

また、米油や露油の信用にあやかろうとして、商標を模造する者も現れ、二十八年二月七日の〔福陵新報〕には、次のような広告が出されている。

奸　商

各地石油商諸君ニ告グ。詐詭奸計ニ注意セヨ。

タンク石油ニ新松の名称ヲ附シ、之ヲ正真ノ松箱石油ニ代ヘ売捌ク者アリ。其箱ノ両側面ニハ他ノ意儀アル横文ノ商標ヲ証シアレドモ、其文字ノ配列巧ニ松箱ノ商標ニ模擬シ、瞥見スル時ハ恰モ真正ノ松箱ニ均シ。諸君ハ決テ斯ル奸策ニ成レル石油ニ触レラレザランヿヲ冀望ス。本件ハ既ニ在長崎米国領事ヨリ長崎県知事閣下ニ照会セラレタルニ、明正ナル知事閣下ハ直ニ其措置ノ労ヲ容レラレ、且大阪府庁ヘモ商議セラレンヿヲ約諾セラレタリ。（中略）

紐育スタンダード石油会社

このころ石油の需要増加は相当のものだったらしく、先行き不足を見越して、米国石油の専売権を持つ横浜居留八番館スタンダード商会が売り渋ったので、石油価格は暴騰、二十八年三月十一日には十八リットル？入一缶が二円十八～十九銭にまでなっている。

二十年代までの石油販売店は、他の商品を販売しながら　石油販売を兼営していた所が多かったようだ。前述した博多の牟田商店などもその一例だが、その外、二十八年五月の久留米市日吉町（元通町五丁目）国武喜次郎糸店（和洋綿糸商）の石油卸商兼営もそのよい例となる。綿糸商が石油卸を兼営するほどだから、小売商がどのような状態だったか想像がつこうというものだ。

二十八年六月には、博多蔵本町五十四番地太田清蔵が、大阪露油のタンク石油特約販売所となっている。同月二十六日の〔福陵新報〕広告に「（今般）左ノ所ニ特約販売所ヲ設ケ、筑前国博多地方ハ弊社ヨリ直接販売不致候間、向後タンク石油御入用ノ諸君ハ、同所ニ於テ御購求被成下云云」として同店の名を挙げてあるから、本項で前述した博多馬場新町牟田商店は、この以前に大阪露油と手を切っていた（石油販売から手を引いた？）ことが知られる。

しかしこのころまでが、露油の全盛時代だったようだ。

謝　辞

本誌前号（『エネルギー史研究ノート』第五号）に、熊本県の東海大学内にある藤原氏の製作になる水車の保存について提言を述べたが、その後、大阪大学教授原田敏丸先生の御尽力で、東海大学においても保存の御意向であることを承った。原田先生や東海大学の関係者に深甚の謝意を表するものである。

（今津健治）